

## 年會に思う



伊藤 一 明

中国四国支部長を仰せつかり数ヶ月が経過しました。この原稿が掲載される頃には、21年ぶりに広島で開催された広島大学東広島キャンパスでの第63“年会”が終わっているはずですが、藤原照文実行委員長の下で各委員とりわけ広島地区の委員が中心となり準備を進めてきましたが、この度は学会準備に身近に身を置くものとして、年会の意義、役割について考える機会となりました。

新年の巻頭言のなかで寺前会長は、分析化学会の将来の進むべき方向性を述べられた後に、分析化学の分野が「環境分析、食品分析、材料分析、医薬品分析、臨床分析などといった衣食住と直接関連する分析分野や基礎科学事象を解明する分析分野など多岐にわたっている」こと、「このことは分析化学が未来の社会や科学を直接支える重要な分野である」と本会の重要性を述べられています。

その言葉どおり、本会会員のバックグラウンドは理学、工学、医薬学、農学などの大学、企業、国公研等とたいへん広範囲にわたっています。それは同時に分析化学に関する研究やその応用への関心や重要度が多方面にわたっていることを示し、それが本会のアクティビティの高さの源泉でもあります。分析化学の対象分野がたいへん広い分だけ、対象とされる項目も多くあり議論も活発です。年会はそれを口頭発表あるいはポスター発表できる重要な場であります。一方で、材料・バイオ・環境等の先端研究のサポート役の側面もありますが、どちらにおいても地道な研究の継続は必要です。本会としてどう関与できるかは重要な役割となります。

年会はセレモニー的な要素が強いといわれることがあります。私は水処理とそれに関するプロセス計測関連で三十代から分析化学分野の勉強を始めましたが、当時この分野でどんなアプローチが可能かを知るために年会や討論会などに参加して多くの講演発表を聞いて要旨集の内容を読んで勉強しました。分析化学分野の広さ深さに圧倒されましたが、学会への参加で新たに実験を始めるきっかけを見つけ大変有難かったことを思い出します。私にとって年会はセレモニーではなく常に最新の研究に触れる貴重な場であります。

一方で、研究会や研究懇談会などの小規模な学会のように、一ヶ所に集まりほぼ缶詰め状態になって一日中関連の発表に浸るのも悪くありません。発表の主要なテーマが、ある特定の測定装置や方法論の基礎とその応用であったり、対象物や現象であったりして議論が進みます。それが今後の展望へのディスカッションの場となり、さらに国際会議にまで広がっていくのは望ましいものです。そのようなスタイルが年会に組み込まれるのも必要であり、当然ではありますがそのような形態の場が一回限りでなく継続されていくことで学会の発展が望めると考えております。

最後になりますが、63年会が多くの方の参加を得て活発な議論で盛会となり会員一人一人に実りある学会になったことを願っております。

[Kazuaki Ito, 近畿大学工学部, 日本分析化学会中国四国支部長]